

の名前 大型のオニヌコ も、その命は二、三ヶ月が  
さもゴミアゲも、

テラツノサメ、その他の魚介類ともあります

1956年

日本海区水産試験研究

# 連絡二二一ス

日本海

(61)

日本海の砂丘漁村

山中義一

第62号

新潟市万代島

日本海区水産研究所

印 刷

株式会社早川商店

昭和31年3月発行

ついていたが、現在はこの村の前面の海においての漁業は殆ど見るべきものがない。村の漁業経済はその大きな部分を出稼・青壯年層の出稼

一 主なる項目 一 第六十二号	
○日本海の砂丘漁村	山中義一郎
○第四回対馬暖流シンボウムにおける講演題目	ジウム
○第三回対馬暖流シンボウム 山中一郎	起要旨
○津軽の漁五郎對	○漁業者と研究者の懇談会

A 漁場開発班、海況調査班分科会  
人最上堆調査結果について

来る三月九日、下関市の水産講習所において左記の題目の講演並びにシンボウムがある。なお、このシンボウムの講演並びに要旨はおつて刊行されることになつてゐる。

## 第四回対馬暖流調査 シンボウムにおける講演題目

来る三月九日、下関市の水産講習所において左記の題目の講演並びにシンボウムがある。なお、このシンボウムの講演並びに要旨はおつて刊行されることになつてゐる。

A 漁場開発班、海況調査班分科会  
人最上堆調査結果について

来る三月九日、下関市の水産講習所において左記の題目の講演並びにシンボウムがある。なお、このシンボウムの講演並びに要旨はおつて刊行されることになつてゐる。

3. 熊登近海の海底地形と底質並びに  
2. 鹿嶋北方漁業開発について  
1. 漁況について

山形水試管野嘉彦  
鳥取水試管田畠喜六  
佐渡北方漁業開発調査について  
新潟水試井羽正一

日本海の海岸線は中央に能登半島が大きく突出する以外、概ね大きな半島もなく、湾や島嶼等も少ない。そのわりに港の入りの乏しい海岸線が連つてゐる地帶が少くない。砂浜地帯の海岸には大抵の場合、砂丘が発達して、諸から数百メートルも、或によつてはもつと遠く砂丘の起伏があり、或は海岸線と平行に、或は直角其他の角度を以てうねつてゐる。そして、このような砂のうねりの隙には漁落がほつと群つてゐるといふようない種独特の景観が見られる。北は青森県の西津軽から、秋田県、山形県、新潟県と海岸線の過半はこのような砂浜地帯によって占められている。日本海の府県の中、厳密な意味で砂浜地帯がないのは兵庫県くらいのものであろう。日本海の海や、海辺の村を論ずる場合、このような砂丘地帯は地域的にも又自然的、社会経済的にも無視できない存在である。寧ろ日本海沿村の一つの特徴ある型とさえ考えられる。筆者等はこのように砂丘地帯は地域的にも又群つてゐる漁村聚落に向心を前より懷いていたものであつたが、幸い三十一年度より新潟大学の人文地理学研究室と提携してこの調査研究に着手することとした。一、二の漁村を踏査したのであるが、そこで共通に見られるものは大概の場合、それらの村は、かつては可なり繁榮した過去を持

- 橋井水試 榎井水試 南澤  
上野山 清篤
6. 一題未定 海流瓶による表面流の調査  
富山水試
7. 昭和29年漂流瓶調査による津輕海峡  
西側の海況について  
北水研 岩崎道喜 道喜  
吉田 茄子川 郡郷一夫  
吉田 喜之助 夫一夫
8. サンマの津輕海峡通過と海況特に大急  
瀬戸との関係 東北水研 水村正勇  
日本海の海況概説  
東大理学 横原敏欣 三郎  
下村敏正
9. 日本海海況の特徴  
東大農学 松江正勇 吉田喜  
下村敏正 昭蔵行
10. 昭和30年日本海海況の特徴  
東大農学 松江正勇 吉田喜  
下村敏正 昭蔵行
11. 北部日本海における微量元素成分の分布  
にについて 東大農学 村田耕正  
宮下村敏正 瑞樹昭  
和敏欣 三郎
12. 寒況変動の主因たる日本海冷水域の特性  
について 日水研 下村敏正 瑞樹昭  
田中時美 昭蔵行
13. 対馬漁場とその漁況について  
西海水研 辻田耕正 瑞樹昭  
菱田時美 昭蔵行
14. 東支那海瀬境漁場の海洋学的構造について  
東京水大 宇田耕正 瑞樹昭  
坪田久道 昭蔵行
15. 海水の濁りについて一入射光と出射光の  
比について 舞鶴海気  
長崎水試 竹内耕正 瑞樹昭  
野田哲 昭蔵行
16. 北海道周辺海域におけるサンマ卵稚魚  
分布の比較 北水研 竹内耕正 瑞樹昭  
佐野千尋 昭蔵行
17. 各種の稚魚、魚卵採取方法の比較について  
長崎水試 竹内耕正 瑞樹昭  
野田哲 昭蔵行
18. 稚魚網の中層曳網方針について  
長崎大水産 元田正雄
20. 19. (一題未定) 資料科学研究所  
稚魚及び大型のランクトン各層採集実  
施結果  
昭和30年夏蒸籠丸による北部日本海  
調査において採集されたオキアミ類に  
ついて(予報) 東大農学 松江正勇 吉田喜  
小牧野正吉 昭蔵行
21. 昭和30年夏蒸籠丸による北部日本海  
調査において採集されたオキアミ類に  
ついて(予報) 東大農学 松江正勇 吉田喜  
小牧野正吉 昭蔵行
22. 昭和30年夏期、日本海冲合のカラシク  
トン・魚卵稚魚の分布について(予報)  
日水研 下村敏正 瑞樹昭  
前田盛伝 昭蔵行
23. 鹿本県沖合(天草西海)における小サバ  
の肉質成分について  
鹿本水試
24. 対馬海峡におけるサバの肝油変化に  
ついて 山口外水試 施永伝  
西海水試 田中七郎 昭記喜  
西海水試 田中七郎 昭記喜
25. 鯛サバと鮭サバの化学成分変化につ  
いて 西海水試 田中七郎 昭記喜  
西海水試 田中七郎 昭記喜
26. 一九五五年における石狩湾サバ漁場の  
海況と漁況  
北海水研 若生洋文 子郎行作 平彰治喜  
若生洋文 子郎行作 平彰治喜
27. 日本海対馬暖流域アジ・サバ漁況と  
気象の関係について  
東京水大 石野隆司 彦誠
28. 山陰冲サハ漁場の構成による  
魚群の考察  
佐野千尋 昭蔵行
29. 山陰冲サハ漁場の構成による  
魚群の考察  
佐野千尋 昭蔵行
30. 九州天草西岸のアジ・サバ未成魚の移  
動について  
九大天草海塚原 博
31. 熊本県沖合(天草西海)における市養  
網の漁況について  
鹿本水試 田中上喜隆  
熊本水試 田中上喜隆
32. サンサバとゴマサバの形態學的差異  
について(予報)  
東大農学 鹿本水試 田中上喜隆
33. ゴマサバ若年魚群の成長度  
鹿本水試 田中上喜隆
34. マアジの飼育実験について(予報)  
西海水研 村上子正吉  
高木健治 昭雄夫
35. サバの実験的研究(続報)  
西海水研 村上子正吉  
高木健治 昭雄夫
36. サバ、アジ等の鰐の構造と餌料の採  
集について  
東北大水産 南子邦郎  
西海水研 村上子正吉  
高木健治 昭雄夫
37. マサバの趨光性に関する特異的反応  
日本水研 内藤嘉七  
西海水研 田中七郎 昭記喜  
高木健治 昭雄夫
38. 日本海におけるマサバの產卵について  
日本水研 深瀬龍  
日本水研 深瀬龍
39. サバの生殖器の組織學的研究と產卵  
期の考察  
長崎大水産 田中七郎 昭記喜  
長崎大水産 田中七郎 昭記喜
40. サバの資源生物学的研究  
九州大水産 相立石新吉
41. フリモ・サンマモ・スルメイカ寒帶魚  
群の生態について  
京都水試 矢野正人

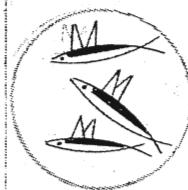
日本海沿岸の重要な地帯、殊にえ馬水道と津軽海峡に潛力な魚探基地を設け、また調査船が定期的に縫うように走つて、海図は勿論、漁探の映像を時々刻々と無線送で水研に送り込まれる。水研の無電室では、各地からの水場量、その他の資料が次から次へとキヤッキされやうして、数枚の大きな海図の上には魚群の動き、海流の様子が手にとるように常に描かれている。

隣りの計算室では、魚探の映像から魚群量を、さらに漁獲高や組成の資料へ勿論無電室で報告された一から、その時の海中の資源量は電子脳の働きでアソトという間に計算され、これも海図の上に記入され行く。かくて、「総重量、約十万貫のサバの群が某々地帯から某々に向つて進行中」とか、「本年春游す

魚探

58

三一書



日本研究叢書

報が無電により各漁港に送られる。このような空想は、果して科学技術の発達によつてなしとげられることを期待するのか正しいであろうか。或は漁業社会経済扶植との関係等を無視した「春眠の夢」にすぎないであろうか。

45. 熊登西岸の足 鹽網漁況について	森 勝	西 川 博
46. アリ網網で漁獲される魚類についての一 ニの考察	日水研 永 田 優一	
47. 日本海西部におけるシイテ漁況の研究 (II) 潟と魚つきについて	大谷學部水產道 庫喜一 宇田 道隆	
48. 日本海海況氣象と漁況活動の關係	萬根水試 梶 喬 俊	
49. 岩岐東岸のサンマについて	東京水產大 宇田 道隆	勇

公若林鷦のフリについて(特に一九五五年冬ブリの魚体測定及び漁獲量調査から得た二一二三の考察) 橋井水試 東南次勇 鳥

千星森  
田野  
哲賓渥男

山陰沖サバ漁場の構成に関する二、三  
の考察

50. 日本海のサンマの研究 (続報) 田中末人  
 東北大畠中正吉

51. 津軽海峡東方海区におけるサンマ漁況予想の一考察 北水義 橋原毛兎

52. 鹿島周辺におけるスルメイカの漁況学的研究 (一) 島根水試児島俊平

53. 隠岐瀬浦郡直海におけるスルメイカの産卵と三トマの知見 日水研浜部基 次

54. 山口県外海沖における大羽イワシの漁況について (オ一報) 石川水試田辺喜六

55. 若狭湾におけるズワイガニの生産時期と移動について 福井水試南沢篤

56. 日本海区において記録された各種魚群について 石川水試田辺喜六

57. 但馬へ香住へを根拠とする底曳網の漁業組成について (サ一報) 兵庫水試名角辰郎

58. 日本海と太平洋におけるカラフトマスの

京師水戰。栗田正人。

第四回 梁山泊英雄排座次  
漁村寒憲調查分科会問題提起要旨

日本海側の漁業はオニクジラセンサスの結果によるものでなく、太平洋岸の漁業にて、その規模が遼闊なものが多いことは知られる限りである。この結果、生産性は低く、一言で表せば墮れているといえる。

日本海沿岸の生産性を高めることは、対馬暖流調査の最終目的にも匪する日本海沿岸の漁業である。資源・海況・漁法等の解説と併せて、この後

純性を克服して、漁業の生産性の向上を如何にして図るべきかが重要な点と考えられる。

日本海沿岸漁業の生産性を高めるためにとして、外部より大規模な資本漁業の導入が、地元の既存漁業を無視して、沿岸小漁民の生活の実態と関連なく行われる場合、そこには多くの摩擦争いと

一方倒の不景気（赤字その他の原因の全ぼうは解明されていなないが）を見るのである。しかしながら日本海沿岸漁業を現在のまゝに放置しておくことは、出稼と漁業によつていつしか漁村を衰退せしむるおそれがあるので、可らぬの方途によつて

現在の小生産をより高い生産性に向上せしめなければならぬ。

これが目的のために、より大きい資本に依り新技術を取  
使しなければならない。ここに共同化によつて、漁民の資本と労力を合せて、生産性を高めつゝ、漁家経営を向上せしめる道を取上げる必要がある。

色々な形で行われ、幾多の実例をみるのであるが、成果をあげているものもある反面、中には行き詰ったところもある。共同化の成果と批判を具体的な事例の中から分析検討し、その中から更に発展の方向を見出して行きたい。このことは漁業至務に新漁法を導入していくためにも、また漁業に必要な資源並に生態面の充実を行ふ面から言つても試験研究挖肉の一つの課題ともなるものと考えられる。

## 共同化の定義

シンボジウムを行つに当つて、共通の概念として共同化的定義づけをするならば、共同化とは小漁民（漁業者）が二人以上集り、資金を出し合つたり、漁船漁具をもつより漁業を営む場合、或は從来定置等に雇われていた漁夫が共同して自分達で漁業を行う場合を言つ。例えば二隻のつり船が規模がより大きいつ一隻の船によつて新な漁業を始めたとか、今迄の船が何隻か共同して大きな網を用ひたとかいうことでゐる。

らは、高貴の方が青森や福前に遺留の際生かしたまま水盆に入れて献上したのが例となつていたと云う。

現在の處、その地方の釣人の話をきいてみると、実際釣上げられるのは年商百匹位で、生産額は少ないようである。

ここで興味ある問題として、前述した様に、昆蟲類の源五郎附との体形の異同、地元附との体形や生態の相違等がある。

琵琶湖で言つて いる源五郎射と体形的にど  
んな関係にあるのか、測定しなければ判然と  
しないが、直年移殖されたものでないと伝え  
られている。  
源至四代の藩主越中守信正の時代（元禄年  
間）に琵琶湖から移植したもので、旧藩時代  
は「源五郎射」といはれていた。

津軽の源五郎射

る。特徴として注目すべき点は経営に参加する人員の間には、底堅關係がないことである。同時に全員において利益も損失も連帶で分つ心のである。生産手段へ漁船、漁具の一郎又は全部を共有するものから、或時期に限つてのみ、或はある特定の漁業にだけ行うアル計算のようなるべく低い段階のものも共同化に含まれる。法的には漁業組合、生産組合、任意組合、經營（＝網組）、漁業公社へこれについては疑問はあるが）といったものから仲商勘定会を含む。

## 漁業者と研究者の懇談会

来る三月八日—十一日の間廿四回対馬暖流シンボヅウムが水産厅主催の下に下関市において開催される。その花会を利用して山口県外海水試主催で地方の漁業者と前記の会式に出席の研究者との懇談会を三月十一日午後一時より開催の予定である。

◎三一年度北日本海鰐漁況予報会議  
例年の通り本年度の北日本海方面における鰐漁況予報会議が、日本研主催新水試セ課當番で、七月治町で開催された。各水試が三月中南以東観測した結果を持ちより資源面と海況面より検討して次の第一次予報を発表した。  
二大魚、三才魚が相半ばするであろう。  
能登以北では資源的に考えて海況が平年並ならば、

現在の水温状態は昭和二四年以来の最低値である。

若し元録年間に琵琶湖から移殖されたとすれば、おそらく、海路によつたであらうが、親魚か又は稚魚かであつたであらう。魚卵なら途中で孵化してしまつたであらうし、親魚や稚魚なら運べないことはないが、琵琶湖から敦賀までの陸行、敦賀から十三港、そこから又陸行で一ヶ月以上の日を要した事であらうから、不可能な事ではないにしても、なかなか大変な移殖作業であつた筈である。